

論文審査の結果の要旨

本論文は、中世を代表する文芸であり、多種多様な異本を発生させながら、広汎な享受の行われた『平家物語』をめぐり、そこから発生したお伽草子がどのようにして制作されたか具体的に検討するとともに、地方の伝承として定着してゆく過程について考察したものである。

第一部では、お伽草子『祇王』の現存諸本について、本文の特質を『平家物語』の諸本と逐一比較・対照することで明らかにする。「祇王」の物語は『平家物語』中の挿話として広く親しまれているが、諸本の中にはこれを欠くものもあり、後補された章段であると考えられる。その「祇王」の挿話を独立した一編の物語に仕立てたのがお伽草子『祇王』であり、現存諸本を詳しく検討した結果、八坂系『平家物語』に依拠した伝本として、岩瀬文庫蔵元和寛永刊古活字版絵入本一冊、慶應義塾大学図書館蔵奈良絵本二冊、京都大学文学部蔵奈良絵本一冊の三本を、一方系『平家物語』に依拠した伝本として、堀江彦三郎氏所蔵奈良絵本二冊、ニューヨーク公共図書館スペンサーコレクション蔵絵巻二軸、京都大学附属図書館蔵奈良絵本二冊の三本を確認した。以上は、いずれも語り本系の『平家物語』に依拠した伝本であるが、従来学界に未紹介であった徳田和夫氏所蔵『祇王・祇女物語』絵巻の本文についても検討したところ、読み本系の『源平盛衰記』に依拠して制作されたものであることが判明した。また、お伽草子『祇王』の一伝本とされてきた弘前市立弘前図書館蔵『妓王』一冊については、弘前藩に仕えた楠美則徳が寛政年間から文化年間に江戸から弘前に伝えた『平家吟譜』の流れを汲むものであり、譜が施される前の平曲譜本であることを明らかにした。

第二部では、まず福岡県田川市に伝わる小督局伝承について、『平家物語』の「小督」の章段に描かれた物語が、どのような経緯で田川の地に伝承されることとなったか考察し、成道寺境内にある七重石層塔と、都落ちした平家の女官の伝承とが結びついて語られるようになったなかで、宿場町を訪れた歌比丘尼などの存在により、『平家物語』の小督局の挿話と結びつけられ、その往生譚として田川の地で語られたと推論した。さらに、近世における『源平盛衰記』の流布により、成道寺に現存する『小督局畧縁記』が記され、伝承の定着を促したとする。ついで、同じく北部九州にまつわる伝承として、最澄の宇佐神宮参詣説話を取り上げ、関東での法華経談義所においては、土地柄についての厳密な区別は必要とされず、見宝塔品の教えを伝えるのにふさわしい説話に作り変えられ、寺院での談義に利用されたことを明らかにした。さらに、諸書に見える「濡れ衣」説話が、博多の地において、なぜ石堂川にある大きな石と結びついて伝承されるようになったのか考察し、それが貝原益軒によって編纂された『筑前国統風土記』に「濡衣塚」にまつわる伝承として記されたことによって定着するいっぽう、『石城志』や『博多之記』などの記述から、近世期の博多にはそれとは異なる多様な言説が存在したことも解明した。近代に入ると、益軒の影響力が薄らいだためか、娘の名を「春姫」とするものが好まれるようになり、「博多七堂」や「石堂」という地名に関わる言説や由来と合わせて、石堂丸の出生譚や太閤町割の伝承までもが結びついて、今日に到っていることを述べた。

第一部については、個別の検証に留まり、文学史的展望を十分に示し得ていない点の物足りなさ、第二部については、推測の根拠を示す資料の乏しさゆえ、一部立論に危うさのあることが指摘されたが、今後とも地道な文献調査を継続することで、新資料の発掘と、新知見を加えた文学史的研究の進展が期待される。

以上のような見地から、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。